

『新しい学校』一九五四年十一月（興文館）

■教員の研究活動

現場の悩みをとくために

矢口 新

研究といっても、現場の先生がやる研究は、専門研究者、いわゆる学者の研究とはちがうでしょう。そういう研究を頭に浮かべて、われわれは実践者なのだから研究なんてごめんだなどと考えたり、研究などということは縁のないことだと考えたりする人が居ます。また一方学者のやる研究に憧れをもって、難しい本をよみ、外国の書をひもどき、あるいは誰はどういうことを言っているなどというように博覧多識になる研究をしたいと考えている人もいます。

私も学者のやるむづかしい研究の方は、実はよくわからん側の方なのですが、そのせいもあって、研究というのを極く常識的に考えるのです。毎日教育をしていて、そこでいろいろ悩みや疑問が出て来たら、それを何とか解決しようと努力することは毎日やって居ります。その努力してああか、こうか、ああでもない、こうでもないと考えたり、人に聞いたりすることそのことがとりも直さず研究だと思ふのです。一体本質的にいって、そういうこと以外に大切な研究がありません。学者先生が、多くの人々の意見をしらべたり、昔のことを調べたり、外国の本を読んだりすることも、その現場の向上に関係があるからやって居られるのだと思います。若しそんなことに関係なしに、

ただ自分の好きでやっているとか、面白いからやっているということならばあまり感心した話ではないと思います。

そういう点からいうと、現場の先生は、一番良い研究者になる立場にあるともいえます。何しろ毎日、現実に教育をやって居られて、そこでわからないことだらけなのですから、それをとりあげて、ああかこうかと研究することが出来る筈です。

学者先生から、むづかしいことを聞いてきて、どうしたらよいかわからないということもありましょう。また自分でこうしたらよいか思ってやっているが、それで本当によいか、どうか自分でも自信が持てないということもありましょう。また人のやっているのを見て、自分はどうもおかしいと思うけれども、併しよくわからないということもありましょう。そういうことをわかるようにしていくことが研究、而も本当の研究だと思ふのです。

この場合、ただ一人でよくよ考えていてはその研究はなかなか進まないのです。どうも恥ずかしいなどといって、一人で悩んでいる人が多いようですが、それではいけないと思うのです。一人で悩むのは、極めて能率がわるいことです。だから、一人でも二人でもよい、まず友達をつくることだと思ふます。そうして、相談しながら行く、これが第一に大切なことだと思ふます。これはむづかしい言葉でいうと、共同研究などという言い方をします。

共同研究などというと、急にしかつめらしくなつて、もう他人行儀になりますから、みんなで相談しながらやるということにしておいたらいと思ふます。所で学校でみなさんは、そういうしんみりした相談、非常に具体的なことで、なやみを打ちあけ合つて、考え合うということをして居られるでしょうか。とかく形式的に、むづかしい言葉を使って、よくわからないことを、しゃべっていると云つた学校の研

研究会がありはしないでしょうか。

よく学校の研究会をみていてなやみを相談し合う会というような形で研究会が行われたらよいと思うことがしばしばあるのです。そのこつは、結局具体的な材料をもとにして話し合うということではないでしょうか。ただ悩みを話し合うだけでは、ぐちり会になる恐れもあるのですが、具体的な材料を取り上げて、そのどこに具合のわるい所があるかというような形で話がすすめられたらよいと思うのです。

自分や人のやっていることを、はっきりおさえて、その具体的な材料を使って、話し合うということが、お互いに本当のことを話合うものになるのではないのでしょうか。所でここにまた一つ問題が出て来ます。それはまず第一に教育の仕事というのが、生徒相手にどんどんやっていることで、流れ去ってしまうということです。そこで具体的な材料をつかまえて話をし合うといっても、それがどういふことなのかがはっきりつかまえられないのです。人のやっている教育などをみても、その時の印象の通りなのかどうかははっきりつかまえられないのです。そういうあやふやな材料をもとにして相談するといっても、これはうまく行くはずがないと思います。

そこで具体的な材料を使って相談すると申しましたが、その具体的な材料をはっきりおさえる工夫をする必要があります。それが研究を能率的にし、効果的にする所以だと思っております。

自分のやっていることでも、人のやっていることでも、これをはっきりと、どれだけのことが行われたかということを押さえることはなかなかむずかしいものです。自分のことは自分が一番よく知っているといわれますが、自分のやっていることは、じぶんはこういう積りでやったというその積りはわかるのですが、それが本当にどうなのかは、よくわからないものなのです。また人のやっている所をみても、その

場合、大抵自分の考えをもってみていますから、なかなか本当の所はわからないのです。

そこで、みなさんが、具体的な材料をおつかまえになる方法として、私は、やっている教育活動について、組織的な方法で、記録をとって行かれることをおすすめしたいと思うのです。例えば自分の授業を誰かに記録してもらおうというように、他人に、客観的に流れていく教育活動の全貌を押さえてもらうのです。いわば一種の速記録をとるのです。教師がどういったか、生徒がそれにどう答えたか、どんなことを板書したかといったことを、どんどん速記にとってゆくのです。この場合、教師の側の活動と生徒の側の活動の二つにわけて、書いて行かれたらよいと思います。その形式は次のような簡単なものでよいと思うのです。

月日	教科	単元名
時間	教師の活動	生徒の活動
5	さあみなさん本の —pをあけて  よんでもらいまし よう  では—くん	生徒がやがや話しな がらあける  はい はい 15、6人手をあげる  はい 立ってよむ —pから—pまでよ む

こういうものが出来ると、相談することが地につくのです。自分は、あれはこう思ったとか、ああだったのではないかなどと、水掛け論をやらなくてすむのです。これをくりかえしてみると、自分のやったことでも、人のやったことでも、その一つの事実が客観的なものになって、ここはこうしたらよいのではないか、というようになるとがよくわかるのです。また自分はここは、こういう積りでやったのだが、実際みると自分の積り通りになっていなかったなどということもよくわかります。また人のやったことをみて、自分はあそこ所、こう思ってみていたが、こうして全体をみると、またちがったことになるのだなということもわかるでしょう。

こういうものを前において相談するのです。現場のなやみというのは、こうして実体をつかまえてみなくては、自分のなやんでいることが何かということもはっきり、わからないことが多いのです。これは教育にかぎらずなんでもそうだと思うのです。

こういうやり方は、随分手間にかかる、そうして気の永い仕事だと思われるかも知れません。そうです、研究ということは、そういう気の永いことなのです。若し人の話をきいてすぐわかり、一寸話し合っすぐわかるのなら、世の中の仕事は簡単になんでも解決してしまつて、それこそ研究することがなくなってしまうでしょう。所が実はそんなことでは解決しないことが多いのです。教育のことを進歩させるということとは、どこまでも現実の問題です。今やっている教育を一步一步高め、進めて行く仕事によって、教育が進歩するということが忘れられてはならないのです。教育の進歩というものはそういうものなのです。そして研究もそういうものなのです。すこしずつ進めて行く、それ以外にないです。それでも十年という時間の中において考えてみて下さい。やっぱり大きく進歩しているのです。進歩とは積みあげだ

ということ忘れてはならぬと思うのです。

今から十年後のことを考えてください。そういう積みあげをやって具体的に悩みを一つ一つ解いて行った人がやはり本当に自信を持って仕事をする人でしょう。教育の実体も、その積みあげによって、本当に自信のある教育となっているのです。

私は今の先生方が、いたずらにむずかしい理論にとらわれて、観念的に論じあたり、研究したりすることは、害あって、益ないと思います。理論をいうのはよいのです。だが具体的な材料を使っていわなくてはいけないと思うのです。具体の実体を中心にしてそこで理論をいふべきだと思うのです。具体的なことの中に理論が生きていなくてはならぬと思うのです。

具体の事実はなれて、抽象的、観念的な計画をたてたり、論じあたりしていることでは、いくらやっても、またもとのもくあみだと思ふのです。ただきりきりまいをして、落ちつく所は、空虚な淋しさということになると思うのです。

遅いけれども、着実に、一步一步、目の前の問題をといて積みあげて行くこと、これ以外に現場の向上はないのではないのでしょうか。

(国立教育研究所)